AGC レポート
山岳地理クラブ会報

VOL　６４

発行 2018 年 12 月 20 日
日本山岳会　山岳地理クラブ
URL●www.jac.or.jp/doukoukai

.山行報告

関東ふれあいの道・神奈川　シリーズ

ＡＧＣ山行のテーマの一つ　「関東ふれあいの道」シリーズの神奈川県コースも大詰めになった。

報告１　⑫　丹沢山塊東辺のみち　　2018 年 10 月実施　今井秀正
報告２　⑩　太田道灌・日向薬師の道　　2018 年 11 月実施　今井秀正
報告３　⑪　巡礼峠のみち　　2018 年 12 月実施　鎌田正彦

::

報告1：関東ふれあいの道⑫

「丹沢山塊東辺のみち」を歩く　10月20日

本厚木駅前から午前8時40分の宮ケ瀬行きのバスに乗り約40分、坂尻バス停で下車。ここは宮ケ瀬湖の南端から南東に7.5km程のところにある山間の静かな集落。関東ふれあいの道のコースは、ここからなぜか舗装した林道を歩いて標高差約300m上の最初のポイントである半原越えを目指すことになっている。コースの最高峰、仏果山を目指すならば歩程は3分の一程度で半原越(はんばらごえ)西の稜線に出る道があるが急登のようではある。でも林道歩きは指定された経路なので仕方がなく、雑談をしながら1時間40分ほど歩いた。高層には秋の薄い雲はあるものの、風も弱くてさわやか、気持ちがいい。半原越手前で小島さんの脚がつる症状が出たため、手当ての後、様子を見ながらゆっくり歩くことにした。

半原越には左仏果山、右経ヶ岳の標識がある。経ヶ岳を経る関東ふれあいの道⑰「北条武田合戦場のみち」も坂尻からここまでは同じ道をたどることになる。3月までには歩く計画だが、できれば舗装道路歩きは遠慮したいところだ。

仏果山方面のコースに入ると50m程度だろうと思うがいきなり階段の急登だ。コースは所々にベンチとテーブルがあって休みつつ進むことが出来る。落葉樹は多いのだが、紅葉はまだ見られず、緑は夏より濃いといってよいほどだ。コース上に動物除けのネットがそこここに見られるが、ほとんどがその役を果たしていない。少々見苦しい残骸化している。

仏果山に近づくと次第に岩が出始め、両側は切れ落ちている。小さな岩稜のアップダウンが四つ、五つ続いた後、仏果山頂747mに到着。シャリバテ気味で早速遅い昼食。

Photo：

周囲は雑木で囲まれ、展望は全くないが頂上北側に高さ10m以上と思われる立派な展望台がある。登ってみると東側に関東平野西部の大展望が見られる。新宿や横浜の高層ビル群、江の島、遠くは房総半島まで見渡すことが出来た。

ゆっくり歩いてきたこともあって15時近くになっていた。暗くならないうちにコースの目的地である半原市街のバス停へ急ぐことにして下山開始。一帯の空気が不安定で雷雨の恐れがあるという予報通り、怪しい雲の出方が気になったが、17時丁度にバス停に到着した。17時20分発のバスで走り出したら外は雨。雨にもやられず、無事に下山が出来て何よりの一日だった。例によって本厚木駅前で反省会の後、解散。（今井・記）

参加者：鶴田、高橋、大西、渡辺、小島、今井（6名）

コース：小田急線本厚木駅－坂尻バス停－半原越－仏果山－半原バス停－本厚木駅　（今井・記）

報告2：関東ふれあいの道⑩

「太田道灌・日向薬師のみち」を歩く　11月11日

今回は山道ではなくバス通りや民家が点在する中を歩くコースで、それこそ“老後”のハイキングに最適と言ってよいのかもしれない。

日向薬師からよろい塚までは乗ってきたバス道を40分程そのまま折り返すように歩くと道脇の小高い所のよろい塚に着く。ここは室町時代の古墳群だそうで扇谷上杉と山内上杉の戦の戦死者を祀るものという。

15分ほど休み、住宅地と畑の中の道を次の上粕谷神社へ向かう。

コースは新しい東名高速道路の工事中で道が変わった中を真新しい広い舗装道路に従って少し遠回りさせられ、高台の産業能率大学の北側にある正門前に登り着く。ここは扇谷上杉定正の糟谷の館址とのことで、丘の上にあることが頷ける。

大学の南側に回り、谷を挟んだ南方にある上粕谷神社へ向かうのだが、周囲の道路工事で館址の遺跡が見つかり、発掘作業等でルートがさらにわかりにくい。指定コースを忠実に歩こうとすると“関東ふれあいの道”の標識を捜しながら歩かないと迷ってしまう。

上粕谷神社には11時半頃到着。太いケヤキが江戸時代半ばからの歴史を感じさせる。陽だまりのベンチで昼食、30分余大休止。ここから百数十メートル東に上杉定正の家臣であった太田道灌の墓所がある。このコースの撮影指定地になっているので立ち寄り、写真撮影。再び上粕谷神社から宅地や畑の中を経て次のポイント三ノ宮比々多神社へ。

耕作放棄地があちこちに見られ、郊外の農業離れを感じる。

三ノ宮比々多神社は標識通りに進むと階段を上った高台の南側にあり、観光客が多いのは意外だった。次の長福寺はゆるい登りの林の中を抜けた集落の中にある。

高野山真言宗長福寺の石柱の脇には急な石段があり、登れば広い前庭があって完熟した銀杏の実が沢山落ちている。市販の銀杏のように大きくて立派な粒。数人がてんでに袋を出して拾い始めてしまった。10分程の収穫作業が終わり、標識に従って踏み分け路のような細い登りを詰めると八幡神社へ到着。あと１ｋｍ弱で今日の終点坪ノ内バス停ということで、境内で最終の小休止。ここで北野さん提供の赤ワインで乾杯。軽く疲れている体には何と美味なことか！

14時10分バス停着。期待はしていなかった毎時1本のバスには6分待てば乗れるという幸運。 14時半過ぎに鶴巻温泉駅に到着。のち軽く“反省”会。

Photo:

参加者：北原、近藤、片野、鶴田、高橋、渡辺、鎌田、今井（８名）

コース：小田急線伊勢原駅-日向薬師バス停-諏訪神社-よろい塚-上粕谷神社ー太田道灌の墓ー三ノ宮比々多神社ー長福寺-八幡神社ー坪ノ内バス停ー鶴巻温泉駅４：30

（今井・記）

報告３：　関東ふれあいの道　⑪

「巡礼峠のみち」　を歩く　１２月１６日（日）

今回のコースは愛甲郡清川村煤ケ谷：御門橋バス停から巡礼峠を経て伊勢原市日向：日向薬師バス停まで 8.8ｋｍを歩いた。

御門橋バス停を９：15に出発し民家を通り抜け川を渡ってすぐに登山道にとりついた。

良く手入れされた杉林の中を、積もった落葉を踏みしめながら丸太階段を一気に登り、白山・御門橋分岐点に出た（標高270m）。スタート直後のかなりきつい登りであった。そこには「関東ふれあいの道」の標識が有り御門橋バス停0.8ｋｍ、むじな坂峠0.4ｋｍ、巡礼峠2.4ｋｍとあった。白山を左後方に見送りながら痩せた尾根道を進み、急なクサリ場を上り下りし、むじな坂峠に着いた（標高235m）。小休止し全員の写真撮影をした。この辺りには登山道に沿うように鹿やイノシシの防護フェンスが設置されていた。さらに10分ほど下って物見峠に着いた。この先巡礼峠までの1.8ｋｍは高さ30m前後のアップダウンの繰り返しが続いた。あいにくの曇り空であったが展望の良い尾根道からは右に丹沢山系大山を、左に厚木・伊勢原の街を、さらには広大な相模平野が眺められた。途中のコブを登りきった10mほど先に三角点が有った。傍に三角点を示す白い標識が建っていた。

11：15巡礼峠到着（標高192m）。広い平坦地で地蔵尊、案内板、休憩用のベンチが有った。巡礼峠の伝説によると、鎌倉時代に関東８ケ国から坂東三十三か所の観音霊場が選ばれ、その霊場をつなぐ道は巡礼往来と言われていた。近隣の星ノ谷観音（座間市）から飯山観音（厚木市）を経て日向観音（伊勢原市）へと続く道中にあるのが巡礼峠である。その昔巡礼の旅をしていた老人と娘がこの峠道で悪者に斬りつけられて亡くなったとの言い伝えが有り、地蔵尊はその２人の供養のため村人が建てたもので、今でもこの峠を通る人を見守ってくれているとのこと。全員で記念の写真撮影。小休止していると小雨がぱらついてきたので急遽雨具を着用して出発した。七沢温泉・日向薬師方面に向かって峠を下り七沢の集落へ。県道６４号伊勢原―津久井線、次いで七沢川を渡り七沢温泉入口を左に折れて七沢神社に11：50に到着。遥拝殿の鳥居をくぐって境内へ、参拝後神社の屋根の下で昼食をとり小雨の中を日向薬師に向け出発した。しばらく歩いて萩原林道に入った。道は舗装され車も十分に通れる広さがあったが展望は余りきかず山肌を右に左に曲りながらだらだらと登っていた。人や車と出合うことはほとんどなかった。途中で道脇の看板を見ると朱書きの「熊出没注意。目撃情報あり」という文字が目に入った。この時期にはもう冬眠しているだろうと話しながらも、時々後ろを振り返りながら歩いた。1.6ｋｍ歩いて2 階建ての展望台に到着。屋上からは丘陵の間に市街地が見えたが遠くはぼんやりと霞んでいた。周辺には沢山の桜の木が有った。春には絶好のお花見ポイントになるんだろうなと思いながら薬師林道を下った。厚木市と伊勢原市の市境を超えたあたりで雨具を畳んだ。13：50日向薬師に着いた。日向薬師は716年に僧行基により開創され多くの公家、武将が参詣している。また修験場としても有名で、境内には国指定文化財の本堂、市指定重要文化財の鐘堂などがある。暫らく休憩していると土産物売り場の方から温かい椎茸茶のサービスを受けた。一口飲むと何とも言えない椎茸の香りが口の中に拡がり元気を頂いた。参拝した後日向薬師バス停まで歩いた。タイミング良くバスに乗る事が出来て15:10に伊勢原駅に到着した。駅前の店で反省会をし、来年の再会を約束して解散した。

Photo:

参加者：今井、近藤、片野、鶴田、大西、鎌田　６名

コース　　本厚木駅8:40発バス―御門橋バス停―白山・御門橋分岐-むじな坂峠―物見峠ー巡礼峠ー七沢集落峠入口ー七沢神社―日向薬師-日向薬師バス停＝小田急伊勢原駅着 17：10

（鎌田・記）

連載・上信の峠路　⑥

奥秩父－唐松尾・黒槐北面林道　その2

富永　滋

【概要】【林道開設の背景】【開設時期】【位置】は AGC レポート vol-61 その１ に掲載

【地勢】

唐松尾北面の、特に槇ノ沢源頭部は崩壊の巣だ。槇ノ沢の谷を歩いていると、晴れた日に雷鳴のような大音響を聞くことがある。今また、どこかの斜面が崩れ落ちたのであろう。その様子は、航空写真を見ると山肌を引っ掻いたような多数の崩壊の爪痕があることで、よく分かる。このような状態で林道を水平に通すことができるのだろうか。これらの崩壊痕は昭和二十三年の航空写真には認められず、四十一年の写真では明確に確認できる。仮に崩壊が主として、秩父山地に大きな被害をもたらした昭和三十四年の台風によるものとすれば、林道造成時には既に崩壊が存在していたことになる。従って林道は、水平を基本としつつも、崩壊地を上下に避けながら作られた可能性が考えられる。

【通行記録―簡易版】

●山ノ神土先の林道分岐～萩止ノ沢左股の大ガレ

山ノ神土から和名倉山に向かう笹原のトラバース道の途中、道が初めて尾根に出た地点が北面林道の分岐とされる。現在、稜線までの一帯は伐採跡の笹原で林道の痕跡は見られなかった。

適当に水平に進んでみると、ツガの森に入って数分で道の痕跡らしいものが見つかった。見えても追いきれないほど倒木が頻発し、微かな痕跡はズタズタに寸断されていた。ガレを渡り、岩稜帯を通過すると、若い小木がヤブ状に密生し歩き難い箇所を通過した。崩壊や倒木跡の空地に植生が戻る過程の一コマである。幾度も渡るガレ上は展望がよく、和名倉山が正面に素晴らしく迫り、両神山のくっきりと雄姿を現していた。小尾根上の露岩もまた、最高の展望地だった。

ガレや倒木帯を次々と通り過ぎるうち、黒木の小尾根状で初めて歩きやすい道型が見えたが、一時的だった。地形は険しさを増し、御殿沢左俣の支窪の細く急なガレと、水流のある細いルンゼを順次渡った。なかなか手強い急な岩尾根があり、林道は桟橋を架けて越していたのかもしれない。露岩が断続的に現われ、上下に交わしながら水平を保った。シャクナゲが繁茂する小尾根は、道の気配はあれども密ヤブのため追い切れなかった。約十米幅の急な崩壊地の上縁を回り込んで通ると、歩きやすい黒木の森と不明瞭な部分とが交互に現れた。

切れ込んだ御殿沢右俣を二〇米も下った一八七〇米圏二股で渡り、暫く続く露岩帯を注意深くトラバースした。御殿沢と萩止ノ沢を隔てる緩やかな大尾根の酷いシャクナゲ帯をやっとのことで抜け、明滅する道型を辿ると、萩止ノ沢左股源頭の巨大ガレに行き当たった。

[時間記録]和名倉登山道からの北面林道分岐-(25 分)-崩壊地の展望岩-(1 時間 10 分)-御殿沢右俣右岸-(35 分)-萩止ノ沢左股大崩壊の右岸 [2017.10.8]

●萩止ノ沢左股の大ガレ～唐松尾北尾根一九五〇米付近(黒岩新道交点)

数十米幅の激しいガレへの侵入は危険で、渡る踏跡も見られなかった。見上げると、五〇米ほど上なら多少傾斜が緩んで何とか渡れそうに見えたので、とにかくガレの縁を登ってみた。行ってみると、ガレ上端近くのその付近は、百米近い幅をもって広く浅く崩れていた。注意深く行動すればトラバースできそうだった。御殿沢右俣で下った分をこの萩止ノ沢左俣のガレで登り返し回復したことになり、無駄に上下した今回の経路は、林道荒廃で落下し桟橋が通行不能になったことによる迂回路だった可能性もある。

断続的な痕跡は、シャクナゲヤブ、倒木に遮られ、時に落ち着いた黒木の森になり、その下に潜む岩稜やガレを渡り、はっきりしたり、不明瞭になったりを幾度となく繰り返した。顕著な地形的特徴がなく、小窪を渡るごとに方角を確認し、基盤地図情報をもとに作成した自前の地形図と照合し、位置を推定した。それでも似たような地形が複数あると判断が付けられなかった。

萩止ノ沢右股は、右岸に幾つもの悪い支窪を入れていて、かつては梯子や桟橋で渡っていたのかも知れないが、相当手こずった。唐松尾直下を過ぎると道は北向きに転じ、感じいい針葉樹の森になった。しかし再び幼樹密生帯に入ると途端に動きが封じられ、道が分からぬままもがき進んだ。道が西向きになったことで、幅広の唐松尾北尾根にかかったと知れた。

以前唐松尾北尾根を登った時とそっくりの、ササやシャクナゲの下生えを持つツガの森に点在する巨岩を縫うように登る、今までよりもやや明瞭な踏跡があった。だがこのような森ではよくある風景でもあり、確信が持てなかった。この日は帰路に着くこととし、唐松尾北尾根を登ってみて、初めて位置推定が正しかったことが確認された。

[時間記録] 萩止ノ沢左股大崩壊の右岸-(1 時間 15 分)-萩止ノ沢右股-(50 分)-唐松尾北尾根 1950M 圏 [2017.10.8]

●唐松尾北尾根一九五〇米付近(黒岩新道交点)～唐松尾・黒槐最低鞍部(1988M)下

苔むした森林のあるかなしかの痕跡も、秩父の古道歩きの経験から、何かしらそこが道と感じることができた。緑一色のツガの森を登り加減に進み、唐松尾北尾根を回った。尾根上を下る上黒岩への小径に寄り道し、抜群に展望がよく意外と広い山頂へ、正味三十分で往復した。一見大変そうだが、見た目ほど難しくはなかった。

水平道はシャクナゲとシラビソ幼樹との繁茂で全く不明に

なり、勘頼みで前進した。勘というといい加減に聞こえるが、勘にもいろいろなレベルがある。多くの過去の経験に基づく勘は、万能・完全ではないが得てして正しいことが多く、うまく言葉で表せないが古道らしい雰囲気を感じることができる。こうして辿った道筋が何かが通った痕跡であるのはほぼ間違いないが、それが林道なのか、猟師・採取者・討伐者の通路なのか、獣道なのかは、その場では判断できない。ある程度長い距離を追ってみて、地図上で予想通りの径路を辿り目的地にピッタリ付いた時に、初めて林道であると確信できる。

次々と降りてくる小岩稜帯のたび道が分からなくなったが、自ら

ルートを探してかわすうち、自然と踏跡がついてくる感じだった。幾つもの岩稜の小尾根を越え、最後に垂壁下を通過すると、やっと落ち着いたモミやツガの美林になった。シラビソ幼樹のヤブが酷くなり、道型が残っていても足元が見えず、なかなかスピードが上がらなかった。さらに倒木や巨礫が加わり、前進すら容易ならない一帯を何とか抜けると、道型が多少回復し、国境稜線が非常に近くなった。試しに稜線まで登ってみると、往復五分で、立派な登山道が通過する一九八八米の唐松尾・黒槐最低鞍部に立つことができた。
[時間記録]唐松尾北尾根 1950M 圏-(10 分)-唐松尾北尾根主尾根(黒岩分岐)-(1 時間 5 分)-唐松尾黒槐最低鞍部下 [2018.4.28]

●唐松尾・黒槐最低鞍部(1988M)下～枝沢渡沢点(1915M)
　初め並走する幾つかの痕跡が幼樹ヤブと倒木の中に続いたが、次第にシャクナゲが優勢になり、シャクナゲの酷い小尾根を越えると、枝沢の沢音が近づいてきた。その左岸に落ちる激しいガレも目に入ってきた。両岸の荒れが酷く、ガレを渡り、幼樹・倒木・巨礫の山腹を進んだ。断続する道の気配は、古林道なのか獣道なのか区別がつかないが、岩などの障害物をきっちり避けつつ等高に長い間続くのは、人が造った道の傍証であろう。またシャクナゲヤブでは道の痕跡が全く見えなくなるが、

痕跡は伸びた枝で全く見えなくなっているだけであり、絡み合って突破不能な通常のシャクナゲヤブと異なり、正道なら枝の下に何とか歩けるスペースが残っている。だから、突破を試みて通れる場所が連続すれば、そこが正道のルートと考えられる。
　緩く下りながら、唐松尾以西で初めての水流である枝沢一八九八米圏右岸支窪を渡った。右岸の崩壊で道型が不明なまま、枝沢の一九一五米付近に下り着いた。推定された地点とほぼ一致し、概ね正しい林道径路を辿ってきたことが確信された。
[時間記録]唐松尾黒槐最低鞍部下-(55 分)-枝沢渡沢点 [2018.4.28]
からくる斉木林道(車道)跡のヘアピンカーブ状折り返し地点に出合った。ここが北面林道の実質的な終点であった。
　斉木林道自体が埼玉県側は廃道となっていて途中分かり難くなっているが、右は雁峠山荘、左は笠取小屋に通じている。
[時間記録]笠取山北面岩壁西端-(20 分)-雁峠山荘 [2017.5.19, 2013.6.23]

林道の断続的で曖昧な痕跡を見失わぬよう進む

幅数十米に及ぶ萩止ノ沢左股の大ガレは、50M 高巻いて渡る

苔むしたツガとシラビソの美しい森林

乗り越えたり潜ったりの猛烈な倒木帯

倒木跡に繁茂の幼樹で道がヤブ化する

上黒岩のドーム型をした岩塔の山頂

AGC レポート　vol-64　2018 年 12 月 20 日
発行:日本山岳会・山岳地理クラブ(代表・北野忠彦)
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-4 日本山岳会　気付
TEL　03-3261-4433　　FAX　03-3261-4441
編集担当:近藤　　E-mail:yoshi-kondo@jcom.home.ne.jp